



上田貞次郎日記

明治二十五年
— 三十七年

Qb-A.291



著者肖像

(一橋大学蔵・油絵額)
宮本三郎画伯筆





上田貞次郎の日記(上段)及び著書(下段)

昭和十二年の日記

12月1日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月2日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月3日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月4日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月5日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月6日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月7日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月8日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月9日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月10日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月11日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月12日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月13日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月14日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月15日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月16日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月17日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月18日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月19日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月20日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月21日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月22日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月23日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月24日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月25日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月26日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月27日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月28日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月29日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

12月30日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

昭和12年の日記

五月

廿九日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿八日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿七日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿六日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿五日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿四日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿三日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿二日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

廿一日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

二十日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十九日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十八日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十七日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十六日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十五日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十四日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十三日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十二日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十一日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

十日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

九日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

八日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

七日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

六日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

五日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

四日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

三日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

二日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

一日 晴 学校(五席、五期) 及期上、**謝**

明治28年の日記

正則中学校時代の著者（明治29年頃）
 （後列右より一人目著者、二人目は加藤成一氏、）
 （前列左端は河野広一氏）



少年時代の著者（明治20年頃）

上田貞次郎日記 目次

凡 例

| | | |
|----------------|-------|-----|
| 明治二十五年（一八九二年） | | 三 |
| 遠足日記 | | 三 |
| 明治二十六年（一八九三年） | | 七 |
| 箱根地方へ向け正則学校遠足記 | | 一三 |
| 明治二十七年（一八九四年） | | 二二 |
| 処世余録 第二冊 | | 二二 |
| 明治二十八年（一八九五年） | | 四〇 |
| 処世余録 第二冊（続） | | 四〇 |
| 処世余録 第五冊 | | 七八 |
| 処世余録 第三冊 | | 八六 |
| 処世余録 第四冊 | | 一一七 |

| | |
|---------------|-----|
| 処世余録 第六冊 | 一三七 |
| 明治二十九年(一八九六年) | 一四八 |
| 処世余録 第五冊(続) | 一四八 |
| 処世余録 第七冊 | 一七三 |
| 処世余録 第三冊(続) | 一九八 |
| 明治三十年(一八九七年) | 二三一 |
| 処世余録 第七冊(続) | 二三一 |
| 明治三十一年(一八九八年) | 二七九 |
| 夏季休暇中旅行日記 | 三二四 |
| 明治三十二年(一八九九年) | 三五九 |
| 明治三十三年(一九〇〇年) | 四一〇 |
| 明治三十四年(一九〇一年) | 四四七 |
| 明治三十五年(一九〇二年) | 四七九 |
| 処世余録 | 四九四 |
| 明治三十六年(一九〇三年) | 五三一 |
| 長野雜記(未完) | 五五五 |

| | |
|---------------|-----|
| 越後旅行雜記 | 五五九 |
| 明治三十七年(一九〇四年) | 五八一 |

写 真

| | |
|----------------------|--|
| 著者肖像(巻頭) | |
| 日記及び著書(巻頭) | |
| 正則中学校時代及び少年時代の著者(巻頭) | |
| 高商時代の著者(本文中) | |
| 筆蹟及び胸像(本文中) | |

跋

| | |
|-------|-----|
| | 六一七 |
|-------|-----|

凡例

一、「上田貞次郎日記」に収録した原文の全貌は次の通りである。

- 1、たびのものを草（和綴・毛筆・縦書） 明治二十五年——三十一年
- 2、日記帳（フイルス綴・鉛筆・縦書） 明治二十六年一月——十二月
- 3、処世余録 第二冊（和綴・毛筆・縦書） 明治二十七年十一月——二十八年八月（日記）
- 4、処世余録 第三冊（横ノット・ペン横書） 明治二十八年九月——二十九年八月（感想等）
- 5、処世余録 第四冊（半紙綴・毛筆・縦書） 明治二十八年（新聞雜誌記事等摘録）
- 6、処世余録 第五冊（横ノット・ペン横書） 明治二十八年九月——二十九年八月（日記）
- 7、処世余録 第六冊（和綴・毛筆・縦書） 明治二十八年（修身則その他）
- 8、処世余録 第七冊（和綴・毛筆・縦書） 明治二十九年九月——三十年五月（日記）
- 9、日記（横綴ノット・ペン横書） 明治三十年五月——三十一年十二月
- 10、反省録（横綴ノット・ペン横書） 明治三十年——三十一年
- 11、夏季休暇中旅行日記（和野紙綴・毛筆縦書） 明治三十一年七月——八月
- 12、日記（横綴ノット・ペン横書） 明治三十二年一月——十二月
- 13、日記（同右） 明治三十三年一月——十二月

- 14、日記（同右） 明治三十四年一月——十二月
- 15、日記（同右） 明治三十五年一月——十二月
- 16、日記（同右） 明治三十六年一月——三十七年十二月
〔明治二十五年——三十七年を本巻「青年編」に収録〕
- 17、日記（横綴ノット・ペン横書） 明治三十八年一月——三十九年九月
- 18、商事経営学に関する意見（和野紙綴・毛筆・縦書） 明治三十八年三月
- 19、日記（横綴ノット・ペン横書） 明治三十九年九月——四十年七月
- 20、日記（同右） 明治四十年七月——四十一年十月
- 21、日記（同右） 明治四十一年十月——十二月
- 22、日記（同右） 明治四十二年——大正二年六月
- 23、日記（同右） 大正二年九月——三年六月
- 24、日記（同右） 大正三年六月——八年八月
- 25、ダイアローグ（対話） 大正四年（第一、二章）
- 26、ダイアローグ（対話） 同右（第一章の改訂）
〔明治三十八年——大正七年を「壮年編」に収録〕
- 27、日記（同右） 大正八年九月——昭和七年十二月
- 28、日記（同右） 昭和八年一月——十四年十二月
- 29、日記（同右） 昭和十五年一月——四月

30、夜雨荘日記（軽井沢夏期日記「社会改造と企業」の装幀見本にペン縦書） 大正十四年—昭和十四年

31、自伝（縦ノート・鉛筆・縦書）

〔大正八年—昭和十五年を「晩年編」に収録〕

- 二、本日記を編集するにあたって左の方針に従った。
 - 1、日記の大部分は片仮名・横書きであるが、全部平仮名・縦組みとした。
 - 2、原文には句読点が殆んどないので適当に入れた。
 - 3、送りがなは原文の通りとした。例えば従て、於て、行たなど。
 - 4、変体がなはすべて普通がなになおした。
 - 5、初期の文章には特に現在廃止されている漢字があるが、原文通りとした。
 - 6、濁点なども原文通りとした。
 - 7、英・独・仏文も原文のままとした。
- 三、人名、固有名詞など明らかな誤字以外は原文通りとした。
- 四、年次の配列および目次の配列は出来るだけ原文の年月日によつた。ただし年月が明らかでないものや数カ月、数年後になつて書き入れた文章等もあるため、殊に「処世余録」は数冊に同時に記録されたので年月の順序については編輯の便宜によつた処が若干ある。
- 五、人名その他の註記は書かないことにした。
- 六、各編についての編輯の経過は跋文を参照せられたい。

跋

「上田貞次郎日記」は、晩年編(特に明記しなかつたが)、壮年編からさらに遡つて明治二十五年―三十七年の十三カ年分を刊行することによつて全部を完了することとなつた。(明治二十五年は旅行記が一編あるだけなので、これを一年に数えることは当を得ないが)さきに発行された晩年編の跋文には明治二十七年からと書いたが、その後フールスを仮綴にした明治二十六年日記帳が発見されたので、凡例の全貌の通りそれから昭和十五年六十一才で世を去るまで四十九年にわたることとなつた。

本編(青年編)は、和文は千八十枚、英文はタイプで百八十枚あり、壮年編より若干部厚で六百頁に余る大冊となつた。本編の内容を摘記すれば次の通りである。

一、明治二十六年は凡例に書いたようにフールス綴に鉛筆書きの日記帳によつた。
二、明治二十七年十一月からは処世余録(二―七)の表題になつており、このうち、日記は二、五、七の三冊で三十年五月までである。本文七四頁にある通り第一冊は紛失したため、二十七年一月―十月は欠けている。処世余録の三、四、六の三冊は感想、聞き書、新聞、雑誌等の抜萃(内容については一九九頁参照)で、期間は二十八年から三十年にわたつてゐる。これらは大体の年次に従つて収録したが、一部は年がちがつてゐるものもある。空白の頁を残しておいて数カ月、あるいは数年後に書き入れたと思われる文章もあるためである。

三、「たびのもちを草」は遠足日記で、「鎌倉遠足記」(二十五年)、「箱根遠足記」(二十六年)、「甲州遠足記」(三十年七月)、「身延山に詣る記」(同年九月)、「妙義山遠足記」(三十一年十月)の五編だが、それぞれ

の日時の日記中に収録し、重複記事は省略した。

四、「反省録」は三十年、三十一年にわたっている。

五、明治三十年五月以降三十七年十二月までは厚表紙のノートに書かれており、日記と感想が交互に入っているが、大体原文の序列にしたがって収録した。

六、本編においても二十八年六月―十二月、二十九年一月―八月、三十年九月―十二月、三十一年、三十二年、三十三年の大部分、三十五年一月―四月は英語で書かれているが、これらは特に英作文の勉強のために書いており、文法その他若干の誤りもあるが、壮年編と同様に原則として原文のまま収録した。なお本編では日付だけの部分等記述に関係のないものは省略した。また、英文中に固有名詞等が漢字で入っているものは、一部ローマ字（イタリック）に改めた。

本編に収録された日記は少年期から青年期の末期に至る時代で、その前半はこの日記をもとにして書かれた自伝（晩年編所載）に語られている。私の記憶によると父は少年期のことを子供には多く語らなかつたが、私の中学時代に散歩の途中に父自身の中学時代の生活について聞いたところ、自分はお母さんの看病をして過したと語り、お前達はそんなことはしないのだと云われて、逆に背筋のふるえる思いをしたことを覚えていた。また、当時まだ子供らしさの抜けない私に対して、自分はお前達の年頃にはずつと大人で生意気だつたと自称していた。そして、これが少年時代に読んだ本だと云つて和綴の「西国立志篇」（中村正直訳）を買つてくれたが、その漢語調がわづらわしく、殆んど読まなかつたように思う。父の死後、この日記を読んでみて、その生い立ちを理解できたが、それは私が社会人となつていた青年期の終りであつた。父は二才にして父（私の祖父）を失つたので、その面影を知らず、母とはながい看病のち、十七才で死別した。この悲境は、逆に日本的な家族制度の重圧から父を解放した。正則中学時代に受けた教養は元良先生の倫理にしる、猪間先生の進化論にしる全く西欧的な思想だつたが、これらを受入れる父の態度はフラン

クリンの修身則に準じたとしても多分に東洋的、漢学的な基盤に立つた規則だつた。この云わば和魂洋才は日清戦争から日露戦争にかけて青年時代を送つた人々にとつては一般的だつたと云えよう。このような時代を背景として、都会的に孤独な境遇のうちに、内省的ではあるがむしろ一個の平凡な学生として高等商業の学生生活を送つた。ここで得たものは高等教育一般のほかに、特に力を入れて学んだ語学力とさらには生涯かわることなく交際することが出来た信頼し、敬愛する先輩友人達であつた。これらの友人とのつきあひによつて自分を再認識するとともに、やがては社会人として立つ心の糧を与えられたと云つてよい。

明治三十三年に高等商業（当時は四年制）を卒業し、さらに専攻部（二年制）に入るに及んで、ようやく学問的興味があらわれ、のちに福田博士の推輓と指導によつて学者として立つに至るのであるが、この間の魂の成長が、この日記に詳細に語られている。本編は明治三十七年迄を収録して青年編としたが、この日記を一個人のかかる魂の歴史としてみるならば、これに続く歐洲留学が終る明治四十一年迄を青年編とすることが適当かと考へる。従つてこの本の区分は、あくまで日記の量によつて便宜的にきめたものであることを諒解願いたい。

今となつて不思議に思われることは、父の名は少青年時代には自他ともに貞二郎と称したが、私が知つた時は自称戸籍面ともに貞次郎だつた。この日記でも明治三十八年に留学するまでは貞二郎（S. Uryeda）と書いており、当時戸籍面がどうあつたかは詳らかにしないが、本編収録の分は青年貞二郎の日記であると云うのも一つのエピソードかもしれない。

この日記は父の死後二十年を経てから出版されたものである。したがつて、西欧諸国の例からみてもこの発表が人を傷つけたり、怒らせたりする過去についての責任からは解除されたと云つてよい。それにもかかわらず、特に晩年編の内容に対して余計なことが書かれてあるとか、他人の批評があるとかの非難めいた評判も伺つた。父が学者であり、職業柄冷静な観察者であつたとしても、日記はあく迄も主観をとおして書か

れたものである。如何に真実を求め、冷静を心がけても人間である以上過ちも錯誤もあるのが普通である。現に父のその折々の評価が後になつてみても当らなかつた例がいくらでもある。このような一個人の記録としてのみ、この日記も存在理由があるのではないかと思う。また、これに対する客観的評価は史家によつて厳正になされるのが適當と考える。少くも編輯者の一人である私はそう割切つて極力内容の修正を避けてありのままの記録として発行したことをここに断りしておく。

この日記の刊行はもともと父の死後二十周年記念事業としてはじめられたものであるから、全部を発表するか、一部例えば晩年編だけに終るか、あるいは全編のうち適当な編輯によつて一冊にまとめるか、費用とにらみ合せていずれでもよかつたわけである。しかしながら、晩年編の次には壮年編、またここに青年編が刊行されて、日記の全貌が日の目を見ることとなつた。昭和三十五年夏に筆写作業をはじめてから、私としては勤務の合間合間に筆写の計画、英文のタイプ、原稿の校訂、編輯計画、印刷、校正、出版に至る雑事を編輯委員の方々とともに続けて来た。したがつて、終りにあたつて、編輯委員（猪谷善一、山中篤太郎、中川孫一、小田橋貞寿の四氏）をはじめこれらの仕事についてご助力願つた方々および本日記出版の記念事業にご援助下さつた父の門下生の方々に重ねて感謝の意を表する次第である。

昭和四十年三月

上 田 正 一

上田貞次郎日記 定価一八〇〇円
(青年編) 送料 一二〇円

昭和四十年五月一日 印刷
昭和四十年五月八日 発行

◎ 著 者 上 田 貞 次 郎
東京都世田谷区玉川等々力
三〇三二

発行者 上田貞次郎日記刊行会
印刷者 安 倍 七 郎

印刷所 東京都港区芝三田豊岡町八
図書印刷株式会社

発売所 慶応通信株式会社

東京都港区芝三田綱町一
振替 東京一五五四九七